

「原爆文学研究会」と私

服部 康喜

「原爆文学研究会」が発足して一〇年になるといふ。故花田俊典さんに誘われて加わってから、私とほぼ同年の彼が先に逝き、はるかに非力な私の方が生き残ってしまった。ともかくも私がこれまで「原爆文学研究」誌に書いたものを見て、どう答えるのか、聞きたい気がする。

実は当初から、私は「原爆文学研究」誌には文学研究の論文を書かないように決めていた節があった。それよりも私は歴史や社会に関するものを書きたがっていたようだ。ちょうど私が属している長崎銀屋町教会の百年史を執筆中のこともあって、プロテストタントキリスト教会とキリスト者の社会的な影響に関心があつた。日本社会の中では依然としてマイナーな存在であるキリスト教会とキリスト者が、それでもある時期においてかなりな影響力を持ちえていたことに気づいたからであつた。特に、長崎の地においてはそうであつた。それでちょうど百年史の戦後編を書き進める中で、同人誌「叙説」と「原爆文学研究」誌に百年史の記述とは別に、論文として発表することにしたのだつた。

あたかも「原爆文学研究会」の発起人であつた故花田俊典さんは、その頃、文学研究に限定した営みから脱しようとしていた。むしろ「原爆文学研究」誌には文学以外の対象—思想、社会、芸術、その他表象され

たものすべて—を論じることを奨励していた向きもあつた。私に關して言えば、長崎と原爆について、まだ語られていない分野が、特にキリスト教会とキリスト者に関わつて存在していると感じていた。それは戦後の長崎、いや日本のある断面を映し出す手がかりとなるに違いない、と思われ、それで書くことにしたのだつた。花田さんはこの私の試みを喜んでいたと思う。

問題は、キリスト教会とキリスト者が戦後日本の復興において、何かを封印して来たのではないか、ということである。それはキリスト教会とキリスト者の営みを手がかりに、広汎に遂行された痕跡を日本社会の中に見つめることである。その封印してきたものを、リアリティの問題として浮上させることが当面に課題である。このことにおいて、実は「原爆文学研究会」がその本来の使命として抱え込んだ課題—文学リアリティの問題、つまりある状況下の人間の抜き差しならぬ表情、言葉の質感の回復と、如何にそれらを表象することが可能なのか、という表現の問題に共鳴するはずなのである。これらの課題に向き合うためには、同時に、今の私たちが置かれている言語状況と対峙していかなければならない。これが「原爆文学研究会」の第二の課題である。

先日、日本文学協会第六十六回大会において、歴史学者の北條勝貴氏、「東北学」の提唱者である赤坂憲雄氏、作家の田口ランディ氏のシンポジウムに出席する機会があつた。私は東日本大震災の後、ようやく本格的に大震災を文学リアリティの問題として取り上げることの出来る時が始まったと感じ、出かけることにしたのだつた。それは期待した以上の真剣なものだつた。まず、北條勝貴氏は東日本大震災後に生じた様々な言説を紹介した後に、多くの言説が被災者の目線を無視したものであることを指摘した。この後、私たちが、今起こっている

震災の現実とどう向き合うのか。白熱した討論と、現地からの報告が多くの聴衆の心を打ったことは確かである。その中で、広島、長崎、水俣と一〇年以上関わって来た田口ランディ氏の告白は、聞く者を釘付けする迫力があつた。「一〇年以上関わって来て、私には内発的衝動として出てくる言葉がなかつた。言葉は私を置き去りにし、私のものでない言葉が横滑りする。私たちは今、強力な言葉の管理下にある」と。

眼に見える国家や権力、組織が言葉を管理する時代ではなくなつた現在、何が言葉を管理しているのだろうか。そのことによつて、見る

べきものを見えなくさせているのは誰なのか。ツイッターが例に出されたように、今や、私たち一人一人が、他者の言葉の管理者・検閲者になつてゐる。このような状況下で、失われるのは他者のリアリテイナなのである。赤坂憲雄氏がシンポジウムの中で、読み上げる『チェルノブイリの祈り』の一節が、静かに会場に流れたことは象徴的だつた。ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ、チェルノブイリ、ミナマタと、人間のリアリテイとそれを疎外する言葉の管理者。これらに私たちはもつと関わるべきなのである。「原爆文学研究会」にはそのような営みを期待したい。